

# 「アラブの春」はどこに行くのか

千葉大学 法経学部 教授

**酒井 啓子**



### 研究の背景

2010年末から2011年にかけて、「アラブの春」と呼ばれる反政府運動が中東地域を席卷しました。30～40年にもわたるアラブの長期政権が、民衆による大規模な路上抗議行動により、倒れたのです。長く安泰と言われたアラブの権威主義体制が、なぜ突然、倒れたのか。世界中の中東研究者がさまざまなアプローチで解明しようとしています。政治学を専門とする我々は、鍵は軍にあると見ています。平成24-27年度科研費基盤研究(A)「現代中東・アジア諸国の体制維持における軍の役割」は、軍が政治変動にどのような役割を果たすのかを解明する研究事業です。

### 研究の成果

「アラブの春」で政権が倒れたエジプトでは、軍と市民運動、そしてイスラーム政党の三つの勢力が権力抗争を繰り返しています。我々の研究チームは、繰り返しエジプトでインタビュー調査や資料収集を行いました(図1)。その結果の一部は、分担者の鈴木恵美さんの著書(鈴木恵美(2013)『エジプト革命—軍とムスリム同胞団、そして若者たち—』(中央公論新社))や、同じく分担者の横田貴之さんの論考などに反映されています。

また、2013年6月、クーデター前夜のエジプトの首都カイロで、イラク戦争後10年の政治展開をさまざまな視角から分析する国際会議を開催し、世界中から若手のイラク研究者が40人近く結集しました(図2)。戦後のイラクでも、国軍・治安組織の再編が急がれていますが、内戦が続くシリア同様、国軍と反政府勢力が持つ民兵との間の軍事力バランスが政治を左右しており、注目すべき研究ポイントとなっています。

### 今後の展望

軍が政治に与える影響は、「アラブの春」を経験した国だけで見られるものではありません。同じアラブ諸国や中東諸国はもちろん、フィリピンやインドネシアなどの東南アジア諸国もまた、市民運動と軍がコラボして独裁政権を倒すという経験をしてきました。そうしたアジア、アフリカの軍の政治的役割を比較することで、非西欧諸国の民主化の行方を分析します。2013年まで実施した科研費基盤研究(A)の成果をもとに、日本で初めての中東政治学の教科書を出版しましたが(図3)、さらにそれを拡充した形で、政治学の一般理論の構築に貢献します。

そして、2014年にはトルコで世界中東学会が、京都でアジア中東学会連合大会が開催されることから、ここで研究成果について英語での国際的発信を行います。

### 関連する科研費

平成18-20年度 基盤研究(A)「現代アジア・アフリカ地域におけるトランスナショナルな政治社会運動の比較研究」

平成21-23年度 基盤研究(A)「現代中東・アジア地域における紛争・国家破綻と社会運動」

平成24-27年度 基盤研究(A)「現代中東・アジア諸国の体制維持における軍の役割」



図1 エジプト調査中に収集した壁の落書き。どのような政府批判がなされているかの分析材料になる。



図2 カイロのアメリカン大学で開催されたシンポジウム「10年後のイラク——紛争、移民、将来」(国際交流基金)終了後の写真。



図3 酒井啓子編(2012)『中東政治学』(有斐閣)